

Title	レヴィナス思想における倫理的主体性の変容プロセス：「ペルソナ」と「顔」の比較、生者と死者の関係を手がかりにして
Author(s)	福若, 真人
Editor(s)	
Citation	現代生命哲学研究 .3 ,p.69-87
Issue Date	2014-03
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10466/13792">http://hdl.handle.net/10466/13792</a>
Rights	

## レヴィナス思想における倫理的主体性の変容プロセス

「ペルソナ」と「顔」の比較、生者と死者の関係を手がかりにして

福若真人\*

### はじめに

未曾有の災害や追い込まれた末の自死、科学の発展によってもたらされる生命活動の操作など、生まれ、生き、死んでいくというプロセスにおいて問うべき課題が現代社会においてますます複雑化している。社会のあり方や自然との関係を含めた変化のなかで、我々はどのように生まれ、どのように生き、どのように死ぬのが、絶えず問われている。その課題の一つに、喪失を経験した生者のあり方も含まれている。

あったはずのものが目の前から不条理に消え去ったとき、残された者はその不在にどのように応答しながら生きていくことができるのか。この問いについては、心理学的な悲嘆研究だけでなく哲学的な考察も積み重ねられてきた。そのなかで森岡正博は、死者と生者の交わり場において立ち現われる、「ありありとした人間らしい迫力」に着目し、それを「ペルソナ」と呼ぶ<sup>1</sup>。

森岡は、生命倫理学における「パーソン」概念とは異なる「ペルソナ」の位相に光を当て<sup>2</sup>、さらに和辻哲郎の「面とペルソナ」(1935)を踏まえながら、自己意識を持った人間のみを表れるものではない「ペルソナ」のリアリティを指摘した<sup>3</sup>。この「ペルソナ」のリアリティは、森岡がかつて論じた「他者論的リアリティ」の流れを引き継いだものである<sup>4</sup>。そして、彼の想定する「他者」のあり様は、エマニュエル・レヴィナス(Emmanuel Lévinas 1906-1995)のそれと極めて類似している<sup>5</sup>。

レヴィナスもまた、他者との、そして死者との関係における生者の主体性に

---

\* 京都大学大学院教育学研究科 博士後期課程(臨床教育学専攻)

<sup>1</sup> 死者と生者との交わりとしながらも、森岡(2012b)は「死者」に限定せず、死にゆく者と生者との交わり、さらには無生物との交わりにおいても「ペルソナ」が立ち現われる可能性を考慮している。だが、人間と無生物との交わりに見て取る「ペルソナ」を、「ありありとした人間らしい迫力」(森岡 2012a、65-66 頁参照)と捉えることに問題はないのだろうか。この点についてはレヴィナスの観点を含めつつ、後述する。

<sup>2</sup> 詳しい検討については、森岡(2010)を参照されたい。

<sup>3</sup> 森岡(2012b)、3 頁。

<sup>4</sup> 森岡(2010)、113 頁。「他者論的リアリティ」の詳細については、森岡(2001)、119 頁以降を参照されたい。

<sup>5</sup> 森岡はレヴィナスの言う「他者」の「到来」を、脳死の人の「現前」という事象に見て取っている(森岡 2001、81-82 頁)。

ついて探求してきた。他者との関係について言えば、『全体性と無限』（1961）などで「顔」（visage）への無限責任が論じられてきた<sup>6</sup>。彼が探求した主体性は、このような無限責任を含んだ他者との倫理的な関係を基調としたものとして理解されることが多い。だが、レヴィナス思想における主体性は、「顔」以外の概念を論じるなかでも検討されており、その全体像を俯瞰したとき、冒頭で問題となったような、生まれてから死ぬまで（あるいは死んだ後も含めて）の主体性についての、一つの変容プロセスが見えてくるのではないだろうか。

そこで、本稿は「ペルソナ」と「顔」の関係を出発点としながら、レヴィナス思想における主体性の変容について検討することを目的とする。具体的には、次の三つの課題に取り組むことにする。まず一つ目に、ペルソナの語源やレヴィナス思想の文脈を手がかりにしながら、レヴィナス思想の「顔」概念と森岡の「ペルソナ」概念の異同について検討する。「顔」や「ペルソナ」に見られる「他者性」の違いに着目することで、レヴィナス思想において論じられる主体性がなぜ変容していったのかが浮き彫りとなるだろう。

そのうえで二つ目に、「他者性」を有する「顔」や「ペルソナ」に対して、生者が具体的にどのような応答をなしうるのかを、レヴィナス思想のうちに見て取る。ここでは主に三つの主体のあり方に着目する。この三つのあり方を時系列に捉えるだけでなく、それぞれのあり方が生者にとってどのような役割を果たすのかを確認する。そして三つ目に、レヴィナス思想における主体性やその変容プロセスに見られる意義と課題について、「生と死の教育」や森岡らが探究する「生命の哲学」と関連させながら検討することにする。

## 第1章 「顔」と「ペルソナ」——触発する他者性と剥奪する他者性

では、レヴィナス思想における「顔」と森岡の言う「ペルソナ」との異同について見ていくことにしよう。そのためにまず、ペルソナの語源を確認し、ペルソナとレヴィナス思想における主体性との接点および「顔」との関係について検討する。

### （1）「プロソーポン」とレヴィナスの「顔」——「顔」としての「ペルソナ」

ペルソナはキリスト教において「位格」のことを指すラテン語であり、英語のパーソンの語源でもある。このペルソナがギリシア語に翻訳される際、「プロソーポン」と「ヒュポスタシス」という異なる二つの概念が訳語にあてはめ

---

<sup>6</sup> レヴィナス思想における「顔」概念についての詳しい検討は、佐藤（2000）を参照されたい。

られたという<sup>7</sup>。「プロソーポン」は「顔」および「仮面」を意味する名詞である。他方「ヒュポスタシス」は、「下に立つ」という動詞から派生した名詞である。

和辻哲郎の「面とペルソナ」において、肉体を従える主体的なるもの（人格）の座として見たペルソナには、ここでいう「プロソーポン」の意味合いが含まれている。死せる能面に「プロソーポン」的なペルソナが現われる点に、我々はペルソナが自己意識を持った人間のみにも現われるものでないという特徴を見て取ることができた。そして、この特徴が、森岡が論じる「ペルソナ」においても重要な論点であった。

では、レヴィナスの場合はどうか。『全体性と無限』において「顔」という概念について主題的に論じられているのだから、和辻や森岡らと同様に「プロソーポン」的なペルソナが重要であると捉えるのが自然であると指摘されるかもしれない。だがその解釈は、半分は妥当であり、半分は誤りであると捉える必要がある。それはなぜか。

確かに、「プロソーポン」は一般的な意味での顔を含意する名詞ではある。その際、そこには「目に対してあるもの」という語源が含まれている<sup>8</sup>。しかし、レヴィナスの言う「顔」は、視覚の対象にも、触覚の対象にもならない<sup>9</sup>。つまり彼は、主体的に見たり、触れたりできるような対象や現象として「顔」を捉えているのではないのである。したがって、「顔」が語源的な「プロソーポン」と合致することはない<sup>10</sup>。

だが、死せる能面に現われる人格としてのペルソナは、レヴィナスの言う「顔」においても現われる。実際、「顔」は、主体が触発を受けて事後的に気づかされるような「非現象」<sup>11</sup>や、「本源的な表出」<sup>12</sup>として論じられている。このような現われに、彼は「他者性」(altérité)を見て取る。つまり、レヴィナスにおいて「顔」は物ではなく、他者性の現われであり、その他者性の現われにペルソナを見て取ることができるのである。彼は「顔」と物の違いについて、次のように述べている。

顔は、存在がその自己同一性において現前しうるひとつの根本的様式である。物とは、決して自分自身で現前しないものであり、要するに自己同一性を持た

---

<sup>7</sup> 「プロソーポン」と「ヒュポスタシス」が、ペルソナの訳語として選定された歴史的動向については、坂口(1999)第二章「ヒュポスタシスとペルソナ」を参照されたい。

<sup>8</sup> 郷原(2012)、291頁。

<sup>9</sup> Lévinas(1980[1961]=2006)、p.168=29頁。

<sup>10</sup> 「プロソーポン」のもう一つの語源である「仮面」についても、レヴィナス思想においては物としての側面を持つ「仮面」と「顔」は区別される。だが、この区別が決して単純ではなく、レヴィナスの中で考えが入り組んでいる。この点については合田(2011)を参照されたい。

<sup>11</sup> Lévinas(1974=1999)、p.112=212頁。

<sup>12</sup> Lévinas(1980[1961]=2006)、p.173=41頁。

ない。……物はきっかけを<sup>レ</sup>与<sup>エ</sup>るのであって、顔を見せるのではない。それは、顔のない存在なのだ。<sup>13</sup>

ここで押さえておくべきポイントは、レヴィナスの言う「顔」は、物とは異なり、ある意味での自己同一性を以て現前しうるものだという点である。つまり「顔」として現われる他者性には、一種の自己同一性が存在するのである。ただし、「ある意味での」「一種の」といった限定をしているように、ここで言う「自己同一性」(identité)が存在することは、和辻や森岡が指摘した「自己意識を持つ」ということとは別のことを言い表そうとしている。では、「自己同一性」を有することと、自己意識を持つことは、どのように異なるのだろうか。

## (2) 「ヒュポスタシス」と「基体化」——「意識」と「人称」を有すること

この問題に答えるために、先に見たペルソナのもう一つの訳語「ヒュポスタシス」について着目したい。「ヒュポスタシス」には、「液体のなかの沈殿」や「非存在から存在が現われてくる」といった動的变化のイメージが見られるという<sup>14</sup>。このイメージは、1940年代のレヴィナスの初期思想に見られた「基体化」(hypostase)と密接に関わっている。

「基体化」という術語は、「ある」(il y a)と呼ばれた匿名態、すなわち「非人称的な」(impersonnel)存在に対する主体の定位を表す語として用いられていた。初期思想において主体のあり方は、「身体への束縛」と「自己の消失」という一見両立しない働きを有していた<sup>15</sup>。この二つの働きに共通したのが、主体性の喪失という問題である。「ある」という非人称的な存在に対して「基体化」をなすことは、主体の定位、すなわち意識の定位を意味している。つまり、「ヒュポスタシス」にある「非存在から存在が現われてくる」というイメージが、意識の定位をなす「基体化」として論じられているのである。

レヴィナス思想において「ペルソナ」(personne)は、「人格」もしくは「人称」などと訳されている。特に初期思想の文脈においては、「人称」と訳されることが多い。この「人称」の獲得を促す「ペルソナ」、言い換えれば「ヒュポスタシス」としての「ペルソナ」は、前節に見た「顔」、すなわち「プロソーポン」的な「ペルソナ」と異なるものなのであろうか。この問いについては後述する。その前に「ヒュポスタシス」としての「ペルソナ」が主体にどのような影響を与えたのかを、確認することにしよう。

<sup>13</sup> Lévinas (2010 [1976]=2008)、p.23=10頁。傍点は原著イタリック。

<sup>14</sup> 坂口(1996)、116頁。

<sup>15</sup> 詳しくは村上(2012)、第3章「逆流する創造——初期の世界論と他者論」を参照されたい。

意識の定位、基体化を通じた人称の獲得は「瞬間」においてなされる。それにより、主体は非人称の「ある」へと融即される恐怖から脱することができた。しかし、「瞬間」においてしか存在できない主体は、絶えず存在することに埋没するという孤独と向き合うことになった。この問題を克服するにあたってレヴィナスが着目したのが、時間および他者との関係である。そして、ここで必要とされた他者こそが、現われとしての「顔」を有する他者なのである。

ここまでの内容をまとめると次のようになる。まず、レヴィナス思想における「ある」に、「人称」の獲得を促す「ペルソナ」を見て取ることができた。本論文ではこの「ペルソナ」を、〈ヒュポスタシスとしてのペルソナ〉と呼ぶことにする。だが、〈ヒュポスタシスとしてのペルソナ〉に対する基体化は、「瞬間」の生成という存在の孤独を生み、常に「ある」への融即と格闘せざるをえない状況となった。そこで、他者性の現われとしての他者の「ペルソナ」から触発を受けることで、主体の存在をめぐる問題の克服が目指されたのである。

このときの他者の「ペルソナ」、すなわち「顔」として現われる「ペルソナ」のことを、〈ヒュポスタシスとしてのペルソナ〉に対して〈プロソーポンとしてのペルソナ〉と呼ぶことにする。物にはない「顔」を現わす〈プロソーポンとしてのペルソナ〉は、自己意識とは異なる一種の自己同一性を有していた。この二つのペルソナの関係について、次節でさらに詳しく見ていくことにしよう。

### (3) 「自己同一性」の呼応関係——倫理的な主体性の変容プロセス

まず押さえておくべきなのは、〈ヒュポスタシスとしてのペルソナ〉も〈プロソーポンとしてのペルソナ〉も共に「他者性」を有しているという点である。だが、それぞれの「他者性」の働きかけには、微妙なニュアンスの違いが見られる。そして、その違いが主体のあり方の違いに影響したと考えられる。

〈ヒュポスタシスとしてのペルソナ〉が現われる非人称的な「ある」は、ハイデガーの存在論とは異なる存在のあり様として論じられたものである。主体にとってこの「ある」は、主体性を剥奪する「他者性」として存在していた。これに対し主体は、「ある」への融即から逃れるために意識を定位した。その結果、主体性を持った存在が保持されたわけであるが、存在することへの埋没（固執）から逃れられなくなってしまった。

瞬間において存在し続ける主体の孤独を克服するには、「他者性」を有する「顔」に対面する必要があった。だが、「顔」の有する他者性とは、「ある」のように主体性を剥奪するものではない。「顔」が「ある」と異なるのは、融即するような非人称的なものではなく、「自己同一性」を有しているためである。融即されることの恐怖は、主体の存在への固執を強化してしまう。これに対し、

「顔」としての現われは、主体に応答を迫り、存在することへの固執を断念させるような触発を行うのである。このような他者性に対する主体の応答が、「存在するとは別の仕方」(autrement qu'être) という倫理的なあり方として、後期思想において探求されることになるのである。

このように、〈ヒュポスタシスとしてのペルソナ〉は主体性を剥奪する働きを持ち、他方〈プロソーポンとしてのペルソナ〉は主体の存在することへの固執を断念させるよう触発する働きを有していたことが分かる。一見すると、どちらも主体性を脅かすような働きに映る。それゆえ、仮に〈プロソーポンとしてのペルソナ〉からの触発を受けたとしても、レヴィナスの言うような主体の応答が容易に行われるわけではないようにも思われる。〈プロソーポンとしてのペルソナ〉に遭遇しても、存在することの固執が断念できず、存在することへと埋没してしまうことは少なくない。

確かに、レヴィナス思想を時系列に沿って見ていくと、このような他者性との関係によって主体性が変容していく過程を見て取ることができる。だが、その変容がなぜ可能になるのか、という点については明らかになっていない。この点についてはひとまず保留し、二つ目の課題に取り組むことにしたい。次章では生者と死者の交わりということも踏まえながら、本章で見た他者性、すなわち〈ヒュポスタシスとしてのペルソナ〉と〈プロソーポンとしてのペルソナ〉に対する主体の応答の具体的なあり方について見ていくことにする。

## 第2章 ペルソナに対する三つの応答——主体—他者間の継承関係

前章ではレヴィナス思想におけるペルソナの位置づけを、「顔」と「ある」が有する他者性の違いに着目しながら、主体と他者の関係のうちに見て取り、その全体像を一つの変容プロセスとして捉えた。森岡の言う「ペルソナ」とレヴィナスが論じた「顔」には、共に〈プロソーポンとしてのペルソナ〉の現われを見ることができた。一方、レヴィナス思想の文脈を辿ることで、〈ヒュポスタシスとしてのペルソナ〉というあり方を見取ることができた。

さて、本章ではレヴィナス思想のうちに見た二つのペルソナに対して、主体がどのように応答しうるのかを具体的に見ていくことにしたい<sup>16</sup>。

---

<sup>16</sup> レヴィナスの哲学的考察においては、日常的な用語が核心となる概念として用いられることがある。だが、郷原佳以が指摘するように、それらには通念とは異なる意味作用が付与されているにもかかわらず、経験的な水準とも決して無縁ではない(郷原 2012、285頁)。日常の事象理解を問い直す営みとして、ペルソナに対する主体の具体的な応答について検討するが、それは熊野(1999)の言う「異貌の倫理」として探究されることになる。

## (1) 「基体化」によって生成される存在——根源的な潜在能力としての生

前章で見たペルソナ、言い換えれば「他者性」に対して主体がどのように応じるかについては、多様に論じられている。そのなかで本章では〈ヒュポスタシスとしてのペルソナ〉に対する「基体化」、〈プロソーポンとしてのペルソナ〉に対する「身代わり」(substitution)、そして「多産性／繁殖性」(fécondité)という三つの主体の応答について検討することにする。

まず「基体化」についてであるが、これについては前章で見たとおり、非人称的な「ある」に対して、意識を定位する働きを意味している。ここで言う「ある」のイメージとしては、夜やリズムなどが挙げられる<sup>17</sup>。端的に言えば、「ある」とは、無そのものではなく、無を埋めるような非人称的な存在を指している。『存在の彼方へ』(1974)の冒頭で、存在の排斥としての死が無意味であると論じられているが<sup>18</sup>、「ある」は主体の死の意味をも剥奪する存在として捉えられているのである。

前章では、単に主体の主体性が剥奪されることへの脅威に対抗する方法として、基体化による意識の定位について見てきた。それにより、瞬間において存在することができたものの、主体は存在することに埋没せざるを得ない状況となるという問題が生じたことを確認した。しかし、その問題があるからといって基体化という働きそのものを消極的に捉えるべきではない。〈ヒュポスタシスとしてのペルソナ〉に対する主体のあり方は、生者にとって不可欠である。

例えば、深い喪失を被った者が自分自身を見失うとき、あるいは自らの空虚に気づかなくてもよいような世界に没入しているときというのは、〈ヒュポスタシスとしてのペルソナ〉に直面している状況であると言える。このような状況において、意識の定位に基づいた行為を以て応答するような主体のあり方は、時として必要となる<sup>19</sup>。

また、〈ヒュポスタシスとしてのペルソナ〉への応答というのは、瞬間における存在を可能にするが、その経験そのものが後の〈プロソーポンとしてのペルソナ〉への応答に際して重要となる。主体性や意味が剥奪されるという経験が、逆説的に主体性や意味を産出するというモチーフは、レヴィナス思想に通底したものである<sup>20</sup>。この点については、〈プロソーポンとしてのペルソナ〉に対す

<sup>17</sup> レヴィナスはリズムだけでなく芸術作品についても、倫理的な対話を脅かすものとして捉えるような芸術論を展開している。その詳細な分析は郷原(2012)を参照されたい。

<sup>18</sup> Lévinas (1974=1999)、p.3=21頁。

<sup>19</sup> 具体的には、喪失に対しては「埋葬」という行為が、空虚を阻害するものへの対抗手段としては「自傷行為」が挙げられる。「埋葬」をめぐる死者と生者の関係については拙稿(2013a)を、自傷行為をめぐる問題については森岡(2012a)を参照されたい。なお、この自傷行為をめぐる森岡の論に「ペルソナ」との関係を見ることができ、それについては後述する。

<sup>20</sup> 根源的な対人関係に現われるこのような構造について、初期思想では死体や幽霊、女性的存



る「身代わり」や「多産性／繁殖性」といった主体の応答にも表れている。

以上のように、〈ヒュポスタシスとしてのペルソナ〉に対する基体化という主体の応答は、生者の根源的な生にとって重要なものである。瞬間の連続として存在することに埋没してしまう危険性が一面にはあるものの、基体化によって瞬間において生成される存在は、他者への関係へと開かれうる潜在能力として基礎づけられているのである。

## (2) 他者の「身代わり」としての「呼吸」——「非場所」への超越

次に〈プロソポンとしてのペルソナ〉に対する主体の応答として、後期思想で論じられた「身代わり」というあり方について見ていくことにしよう。

レヴィナスが「身代わり」という概念に付与したのは、他者の犠牲となるような主体のあり方ではない<sup>21</sup>。むしろ、「身代わり」に見出したのは、基体化が招く「存在することへの埋没」から主体を解き放つような働きであった<sup>22</sup>。『全体性と無限』において論じられた「顔」への責任は、『存在の彼方へ』においては他者の「近さ」(proximité)として捉えられていた。そして、この「近さ」は、主体の「身代わり」という応答に対して現われると考えられていた。

では、他者の犠牲とならないような「身代わり」とは、どのような営みを意味しているのだろうか。『存在の彼方へ』の終盤で、レヴィナスはその具体的な現象として「呼吸」(respiration)を取り上げる。彼は次のように述べている。

呼吸がその意味を余すところなく明かすのは、他者との関係において、隣人の近さにおいてであり、この近さが隣人に対する責任、隣人の身代わりになることなのだ。とはいえ、このような氣息は存在しないことではない。この氣息は内存在性の我執からの超脱であり、存在すること、存在と存在しないこと双方から排除された第三項なのである。<sup>23</sup>

ここでの「呼吸」は、他者との関係、「顔」の現われという隣人の近さにおいてなされる「身代わり」を意味する。そして、「身代わり」としての「呼吸」、すなわち「氣息」(pneumatisme)は、「存在しないこと」ではない。つまり、主体が犠牲となるという意味ではない。氣息は「内存在性の我執から超脱」、すなわち「存在することへの埋没」からの開放を意味するのである<sup>24</sup>。

---

在との関係をめぐって論じられている。詳細は村上(2012)第3章を参照されたい。

<sup>21</sup> Lévinas (1974=1999)、p.185=331頁。

<sup>22</sup> Lévinas (1974=1999)、p.160=287頁。

<sup>23</sup> Lévinas (1974=1999)、pp.228-229=404-405頁。傍点は原著イタリック。

<sup>24</sup> 「呼吸とは幽閉からの開放としての超越である」(Lévinas 1974=1999、p.228=404頁)。

この「呼吸」の息は他者から吹き込まれる。それにより、主体は「最後まで息を吸い込んで、ついにはこの吸気が呼気に転じる」<sup>25</sup>に至る。その様は、生気を吹き込まれ「ペルソナ」となった能面と類似している。つまり、「身代わり」としての「呼吸」から見えてくるのは、〈プロソーポンとしてのペルソナ〉である「顔」の現われによって、主体自身が生気を吹き込まれた「ペルソナ」となるという主体のあり方なのである。

他者から吹き込まれた息を吸う営みとしての「呼吸」には、「息切れ」(essoufflement)を伴う。そして、この息切れが主体に「存在することへの埋没」を突き破ることを可能にするのである。息切れから「吸気が呼気に転じる」に至ったとき、主体は基体化によって獲得した存在への固執を手放すことができるのである。

この「身代わり」としての「呼吸」に、レヴィナスは「存在するとは別の仕方」という自己の超越を見て取った。このとき、自己を超越することは、自分自身で自己を巧みに導くようなあり方ではなく、他者との関係、〈プロソーポンとしてのペルソナ〉の現われに対して受動的になされるものである。そのような超越によって自己は「非場所」に至る<sup>26</sup>。つまり、「存在するとは別の仕方」という水準においては、主体は対象として位置づけられる場所を持つことができなくなるのである。

### (3) 未来の地平での「多産性／繁殖性」——「子ども」という自己同一性

このように、「身代わり」としての「呼吸」という営みは、他者の「顔」への応答を通じて、基体化による「存在することへの埋没」から解放され、「非場所」へと至る。レヴィナスは、「身代わり」による自己超越に「自分自身を担いつつも、唯一無二の存在としての私の唯一性によって、他者に対して贖う」<sup>27</sup>という性質を見て取る。

つまり、「身代わり」となることは、自らを犠牲に差し出すことではなく、肉体としての主体を担いながら、存在することの固執を開放するという他者への贖いを行うことを意味するのである。そして、「身代わり」によって主体は「非場所」に至ったとしても、そこには「唯一無二の存在としての私の唯一性」が残されているのである。言い換えれば、〈プロソーポンとしてのペルソナ〉に対する主体の応答は、その現われに受動的に応答することで、「自己同一性」を有した〈プロソーポンとしてのペルソナ〉へと主体性が変容する営みを表してい

<sup>25</sup> Lévinas (1974=1999)、p.229=405 頁。

<sup>26</sup> Lévinas (1974=1999)、p.229=405 頁。

<sup>27</sup> Lévinas (1974=1999)、p.229=405 頁。

るのではないだろうか。

その仮説を検証する現象として注目するのが、三つ目の「多産性／繁殖性」という主体をめぐるあり方である。「多産性／繁殖性」は、『全体性と無限』の第四部「顔の彼方」において論じられた概念であり、中期思想以降、触れられることがなくなった概念でもある。1946年の講演「時間と他者」のなかで「多産性／繁殖性」が取り上げられた際、それは未来の地平において「ある個人的な生が超越的な出来事の只中で構成される」<sup>28</sup>現象として捉えられた。この「多産性／繁殖性」を通じて構成されるものが「子ども」であった<sup>29</sup>。

つまり、「多産性／繁殖性」のイメージとして語られたのは、「子を産む／生む」ことである。しかし、レヴィナスが度々語っているように、中期思想において論じられた「愛撫」や「多産性／繁殖性」といった概念は、生物学的な現象を問題とするために語られたものではない。それらの議論は、「顔の彼方」という言葉に表れているように、他者性に対する主体の関わり方を探求するものとして論じられていたのである。

では、「多産性／繁殖性」において論じられた、「親」としての主体と「子ども」との関係にはどのような特徴が見られるのか。「多産性／繁殖性」の親子関係を特徴づけるのが、「私は私の子どもを有するのではない。私はある意味では私の子どもである」<sup>30</sup>というレヴィナスの記述である。この奇妙な記述は、前節の「身代わり」、そして〈プロソーポンとしてのペルソナ〉をめぐる主体のあり方を手がかりにすると、次のように理解できるだろう。

すなわち、「多産性／繁殖性」における「子を産む／生む」という営みが意味しているのは、他者との関係を通じて主体の「自己同一性」が生成される営みのことである。ある個人的な生の「超越的な出来事」とは、「顔」の現われに息吹かれた「息切れ」のことを意味する。そして「私の子ども」が意味するのは、息切れを伴う「呼吸」によって構成された、自己超越の果てにある「非場所」における「自己同一性」のことである。

このように理解すると、「多産性／繁殖性」が「私の子どもを有する」こと、すなわち生物学的に子どもを産むことを直接的に言及していないと考えることができる。だが一方で、〈プロソーポンとしてのペルソナ〉という自己同一性を生成する現象として自己超越的な「多産性／繁殖性」を捉えたとき、それは自

<sup>28</sup> Lévinas (2011 [1979]=1999)、p.84=294 頁。

<sup>29</sup> レヴィナス思想の「子ども」(enfant) 概念における「多産性／繁殖性」の位置づけについては、拙稿 (2013b) を参照されたい。また、「多産性／繁殖性」論における「子ども」を、檜垣 (2012) は「逆向き幽霊」として捉えている。檜垣のこの解釈は、初期思想で論じられた死体、幽霊、女性的存在という根源的な対人関係が中期思想、後期思想へと展開されていることを示唆するものと考えられる (注 20 参照)。

<sup>30</sup> Lévinas (2011 [1979]=1999)、p.86=295 頁。

己同一性を他者に、ひいては次世代に差し出すという生物学的な主体の営みをも含んでいるように捉えることができるのである<sup>31</sup>。

### 第3章 ペルソナをめぐる倫理的な主体性変容論の射程

さて、ここまで森岡正博の「ペルソナ」論を補助線にして、レヴィナス思想における主体性の変容プロセスについて検討してきた。前章では、第一章で見た二つのペルソナに対し、レヴィナス思想における主体の応答として具体的などのような現象が見られるのかを明らかにした。

基体化は、生者の根源的な生にとって重要な役割を果たし、他者との関係に開かれる潜在能力としても捉えることができた。また、他者から息吹かれる息に受動的に応答する「身代わり」としての「呼吸」には、非場所における自己同一性を帯びた主体性へと変容する自己超越の働きが見られた。そして、そのような働きは「多産性／繁殖性」において、他者への、将来世代への自己同一性の贈与の役割を果たしうるということが明らかとなった。

本章では、レヴィナス思想におけるこのような主体性の変容をめぐる論点に対して、どのような意義と課題が考えられるのかを検討する。そのうえでこの変容論が、生者と死者、主体と他者との関係について問う領域として、「生と死の教育」や、森岡らが探究する「生命の哲学」にどのような観点を与えるかを検討する。

#### (1) レヴィナス思想における倫理的な主体性変容プロセスの意義と課題

まずは、これまで見てきたレヴィナス思想における主体性の変容プロセスと、主体の具体的な応答について検討する。

第一章で我々は、レヴィナス思想のなかに、〈ヒュポスタシスとしてのペルソナ〉と〈プロソーポンとしてのペルソナ〉という二つのペルソナを見て取ることができた。これにより、ペルソナと言い換えた二種類の他者性の現われ——剥奪する他者性と触発する他者性——に対する、異なる主体のあり方が明らかとなった。そして、この主体性の違いをレヴィナス思想の文脈と重ねることで、倫理的な主体性の変容という流れを見て取った。

ここで注意しておくべきことが二点ある。一つは、レヴィナスの文脈のうちには主体性の変容を見て取ったからといって、それは主体性の間に優劣をつける

<sup>31</sup> レヴィナス思想においてこのことは、「贈与を課する犠牲」を超えた「贈与する権能の贈与」とであると捉えられ、筆者はそこに〈善さ〉(Bien)という性質を見て取った(福若 2013b, 335-336頁)。村上によると、このような主体のあり方をレヴィナスの後期の歴史概念にも見て取ることができるという(村上 2012, 191頁参照)。

ようなことにはならないという点である。確かに、基体化という行為に主体性の課題が見られ、それを克服する方途が中期・後期思想において探求された。だが、第二章で述べたように一方で基体化に表れるような主体性が、生者自身の生にとっても、他者との関係にとっても、むしろ不可欠であるという積極的な側面を捉えることができるのである。

つまり、本論文で見てきた変容論は、レヴィナス思想を単に克服すべき主体性とは何でどのような主体性を目指すべきかという文脈として読むものではない。そうではなく、この変容論は主体と他者、生者と死者との関係において立ち現われる主体性がどのようなものであるのかを分析し、その主体性の動きに影響するものが何であるのかを捉え直すことを目指すのである<sup>32</sup>。ゆえに、我々は主体性が変容すべきだと論じるのではなく、主体性の変容が生じる要因が何であるのかを問う必要がある。

この点については、〈プロソーポンとしてのペルソナ〉すなわち「顔」の現われに見たような「自己同一性」がその要因の一つであることを、第一章で確認した。『全体性と無限』においてはこの「顔」の現われは、「ことばを語ること」(parole) にも見出され<sup>33</sup>、「教え」(enseignement) がその具体的な現象として取り上げられている。

ここで言う「ことば」とは、「言語」(langage) のことを言い表しているわけではない。『存在の彼方へ』で繰り返された「〈語られたこと〉」(le Dit) が表れている言語に対し、その手前ないし彼方にある働きとしての「〈語ること〉」(le Dire) が、ここで言う「ことば」を意味している。つまり、主体性が変容する要因の一つとしての「教え」や「顔」に現われる「ことば」は、一般的な言語を介したコミュニケーションを指すのではない。むしろ、そのコミュニケーションが成り立たないような接触の場面に、「ことば」は現われるのである<sup>34</sup>。

レヴィナスはこのような「ことば」を伴う「教え」に対して、学び手は「暴力的ではないしかたで動かされる」と言う<sup>35</sup>。ここに注意すべき二つ目の問題がある。第二章で我々は、「多産性／繁殖性」という主体のあり方に、将来世代を含めた他者へ「自己同一性」を差し出すという働きを見て取った。仮に、「教え」が暴力的ではない形で主体を動かすのであれば、「教え」に伴う「ことば」

---

<sup>32</sup> ここで見た立場は、レヴィナス思想を倫理思想ではなく現象学の方法論として読み取る村上靖彦の観点と重なっている(村上 2004、29頁；37-38頁)。日常の事象理解を問い直す営み(注16)は、この現象学的方法論によって可能になるのである。

<sup>33</sup> 「顔が啓示されるとは、ことばを語ることなのだ」(Lévinas 1980 [1961]=2006、p.167=28頁)。

<sup>34</sup> 例えばそれは、森岡(2012b)が脳死患者に見た「ペルソナ」の現われや、緩和ケアの現場における「コミュニケーションの手前のコンタクト」(村上 2012、68頁)として見ることができる。

<sup>35</sup> Lévinas (1980 [1961]=2005)、p.22=81頁。

に現われるような「自己同一性」が非暴力的であるのと同様に、「多産性／繁殖性」として現われる主体の「自己同一性」もまた非暴力なものとなる。だが、主体の「自己同一性」を非暴力なものとして捉えることに問題はないのだろうか。

この点についてレヴィナスは、他者に対する主体の責任について、他者が同じように責任を負うことを問題にはしていない<sup>36</sup>。つまり、「多産性／繁殖性」を通じて、〈プロソーポンとしてのペルソナ〉へと変容する可能性は肯定することができたとしても、それが他者に対して同じように働きかけるとまでは言えないのである。その意味において、「多産性／繁殖性」として現われる主体の「自己同一性」を非暴力なものであると断言することはできないのである。

## (2) 主体性の変容論から捉え直した「生と死の教育」

この点を考慮したとき、「生と死の教育」はいかなる意味を持ちうるのであろうか。この問題は教育という営みそのものに突き付けられるものでもあるが、ここでは本論文が扱う生者と死者との関係という課題について主題的に取り組む「生と死の教育」に限定して検討することにする。

生や死、いのちを扱うような授業を行うということは、何を意味しているのか。ここまで見てきた内容を踏まえるならば、それは〈プロソーポンとしてのペルソナ〉に触発され、倫理的に応答する主体性へと変容する契機を提供する営みであると捉えることができるだろう。表面的には、死がどういうものかといった生物学的な知識を「言語」として教えるのであるとしても、その核心は、死や生に現われる「ことば」に触発を受ける経験をするところにある。

もちろん、「言語」による知識の学びが主体の存在にとって有益に働くことは十分に考えられる。つまり、知識としての学びは、〈ヒュポスタシスとしてのペルソナ〉に対する主体の応答を意味するのである。その点を考慮するならば、いのちを扱う教育が生き物を育て、殺すことから学ぶといった経験主義的なものに偏る必要はない。

この点を踏まえた場合、〈プロソーポンとしてのペルソナ〉に触れることを口実に、生き物を育て殺すような授業を正当化するのだとすれば、そこには「いのち」を物として享受しようとする主体の暴力性が問題として立ち現われてくるだろう。また、そのような問題に教育者が配慮したとしても、それぞれの学び手が学習内容から〈プロソーポンとしてのペルソナ〉の触発を経験する水準に至らなければ、そこにある「いのち」は教材や知識という対象となり、ともすればその「いのち」を傷つけてしまうことさえ起こりうる。

生や死、いのちを扱う授業を行うということは、このような危うさを一方で

<sup>36</sup> Lévinas (1982=2010)、pp.94-95=124-125 頁。

抱えている。それゆえ、現場で実践する教育者の苦勞は計り知れない。だが、社会の変化に応じて、〈プロソーポンとしてのペルソナ〉との接触の仕方も変わってきたことを受けて、「いのち」という「ことば」に触れる機会を意識的に設ける必要があることも確かである。とはいえ、いのちを扱う授業によって、学び手が変容の機会に遭遇するかどうかは、教育者の与り知るところではない。

教育者にできるのは、〈プロソーポンとしてのペルソナ〉に触れる機会そのものを提供すること、その機会に近づくためのきっかけを提供すること、もしくはその機会に学び手が遭遇することができるように、〈ヒュポスタシスとしてのペルソナ〉を通じて学び手を存在させることなどであろう。そのためには、学び手に「問いを立てる」<sup>37</sup>ことを可能にさせるような教育者の研鑽が必要となる。そして、その研鑽は、〈ヒュポスタシスとしてのペルソナ〉と〈プロソーポンとしてのペルソナ〉双方への応答がどのようなバランスでなされるかに左右される。それゆえ教育者にとって、「生と死の教育」そのものが、ペルソナに対する倫理的な主体の応答となるのである。

### (3) 「生命の哲学」における「ペルソナ」の捉え直し

さて、前節に見た生と死、いのちを扱うような教育が抱える問題は、森岡らが探究する「生命の哲学」の問題群の一つにも含まれている<sup>38</sup>。最後に、このような共有した課題を抱える「生命の哲学」において、ここまで見てきた内容を踏まえながら、「ペルソナ」についてどのように捉え直すことができるのか検討することにしたい。具体的には次の二点に着目する。

一つは、森岡の「ペルソナ」論における〈ヒュポスタシスとしてのペルソナ〉の位置づけ方である。レヴィナス思想の文脈とともに見てきたように、森岡が生者と死者との交わりの場において見て取ったのは、レヴィナスの言う「顔」の現われ、すなわち〈プロソーポンとしてのペルソナ〉であった。これに対して、レヴィナス思想では〈ヒュポスタシスとしてのペルソナ〉を主体と「ある」との関係のうちに見て取ることができた。では、森岡の言う「ペルソナ」と〈ヒュポスタシスとしてのペルソナ〉は相容れないものなのであろうか。

この問いに対し、生者と死者との交わりの場、とりわけ脳死患者とその家族との関係のなかに「ペルソナ」を見て取った森岡の文脈からは、その答えを得ることは難しい。だが、「生命の哲学」の課題の一つでもある「存在肯定」をめぐる問題に、その手がかりを得ることはできるように思われる。ここでは、彼

---

<sup>37</sup> 「問いを立てる」(poser une question)とは、レヴィナスが「ことばを語ること」(parole)に対する働きとして見た学び手の応答のあり方である。詳しくは拙稿(2014)を参照されたい。

<sup>38</sup> 森岡ほか(2008)、18頁。

が取り扱った具体的な現象として、「自傷行為」に注目したい。

森岡が着目したのは、自傷行為のうちにある一種の異議申し立ての側面である。彼は、生きることの深いよろこびを奪うような快樂や快適さの追求を「無痛化」と捉え、無痛化する現代社会を支えている自分自身を否定し、そこから脱出する働きを自傷行為のうちに見出したのである<sup>39</sup>。このような働きを表す自傷行為は、ここまで見てきた内容で言えば〈ヒュポスタシスとしてのペルソナ〉に応答する「基体化」の働きに重なるのではないだろうか。

レヴィナスの文脈に即した場合、主体の生きることの深いよろこびが奪われる事態に対して、基体化によって人称を獲得する側面を、〈ヒュポスタシスとしてのペルソナ〉から見て取ることができるが、「生命の哲学」においてはそれを存在肯定の一面として捉えることができるだろう。そして、このことは生者と死者の交わる場においても見出すことができるはずである。喪失の経験が主体にとって〈プロソーポンとしてのペルソナ〉ではなく〈ヒュポスタシスとしてのペルソナ〉との接触であった場合、そこには自傷行為のような基体化による存在の定位が必要となりうるのである<sup>40</sup>。

そして、このことは二つ目の問題に関わる。生者と死者の交わりの場に現われる「ペルソナ」について、森岡は「ありありとした人間らしい迫力」と表現している。一方で彼は「ペルソナ」が死者や生者に関わらず、遺品や、場合によってはロボットや人形にも現われると述べている<sup>41</sup>。無生物においても「ペルソナ」が立ち現われるかという問いについては、それが〈プロソーポンとしてのペルソナ〉、〈ヒュポスタシスとしてのペルソナ〉、あるいは単なる物のうちいずれの形で現われるかによって見方が変わってくる。

この点について森岡は、物とペルソナの分かれ目を「関係の歴史性」の有無によって区別している。では、〈ヒュポスタシスとしてのペルソナ〉と〈プロソーポンとしてのペルソナ〉の現われの違いを分けるものは、何なのであろうか。この違いについては、「関係の歴史性」では区別することができないのではないだろうか。「生命の哲学」として、この問題にどのような応答を見出すことができるのか今後問われる必要がある。

---

<sup>39</sup> 森岡 (2012a)、178-179 頁。

<sup>40</sup> もちろん、基体化の働きとして自傷行為を正当化することはできない。過剰な自傷行為の末に結果として命が奪われてしまう事態は、存在の排斥という逆説的な形で、生者の根源的な生から外れてしまう。また、自傷行為のなかにはファッション性の高い、すなわち無痛化に対抗するのではなく、無痛化する文化に組み込まれる性質のものも含まれるため、ここで言う自傷行為もまた限定された意味合いを持つものとなる。

<sup>41</sup> 森岡 (2012b)、7 頁。



## おわりに

以上、本論文では、森岡の「ペルソナ」とレヴィナスの「顔」との比較を出発点としながら、レヴィナス思想における主体性の変容プロセスと主体の具体的な応答について検討し、そこから見えてくる意義と課題、「生と死の教育」や「生命の哲学」に提供する論点などを明らかにした。それにより得られた知見と課題は、次のとおりである。

まず、「ペルソナ」と「顔」の比較を通じて、〈プロソーポンとしてのペルソナ〉と〈ヒュポスタシスとしてのペルソナ〉というペルソナの二つの側面を明らかにした。そして、レヴィナス思想において、この二つのペルソナに応答する主体性を具体的な現象とともに確認した。それにより、異なる主体性の変容という流れを見て取った。だが、それは主体性に優劣をつけるものではなく、生者と死者、主体と他者の関係において、状況によって必要となる役割があることを示唆するものであった。それゆえ、変容論として問うのは、その変化が生じる影響がどのようなものなのかを解明する点にあるのであった。

このような変容論において、具体的な主体の応答を見て取ったわけだが、〈プロソーポンとしてのペルソナ〉に対する応答の果てにある主体性が、「顔」の現われに見た「自己同一性」と同じものになりうるかどうかは明らかではなく、非暴力なものとなるとは断言することが出来なかった。その点に、「生と死の教育」の難しさを見出しながらも、教育者自身の倫理的な主体の応答が、学び手の「問いを立てる」ことを可能にする「教え」につながりうる余地は残された。

他方、この変容論に着目することによって、〈プロソーポンとしてのペルソナ〉と〈ヒュポスタシスとしてのペルソナ〉を隔てる要因が何かという問いが新たに生じてきた。それは、現われに応じる主体側の状態も少なからず影響しているとも考えられるが、本論文で見てきた範囲でのレヴィナス思想の文脈では十分に答えることができず、「生命の哲学」からの応答が俟たれるところとなった。

さて、このような知見と課題に加えて、レヴィナス思想の主体性の変容論に関して若干の補足を行いたい。特に、第二章で見た「多産性／繁殖性」のあり方について、それが生物学的な「産み」とどう関わるかを詳しく検討することができなかった。具体的な「産み」をめぐる暴力性の問題は、レヴィナス思想においてどのように位置づけることができるのか。また、「自己同一性」を生成するような主体の変容が将来世代に関わりうるという点において、それが生物学的でない場合であっても、「育て」や世代継承の問題に向かいうる<sup>42</sup>。その点

---

<sup>42</sup> 例えば、西平直の言う「ジェネレイショナル・ケア」という問題と密接に関わると思われる（西平編 2013、132-137頁）。成人期の課題として「いのちのバトンリレー」をいかに行うかという「ジェネラティヴィティ」（generativity）の問題は、レヴィナス思想における「多産性

についても、本論文で確認したように、それが暴力的な営みとなる危険性にどう立ち向かえるのか、そこに教育という営みがどのように関わることができるのかが問われることになるだろう<sup>43</sup>。

以上のような課題と展望を確認しつつ、本論文を閉じることにする。

\*本論文は、2013年11月7日に大阪府立大学 I-site なんばにて開催された「大阪府立大学 21 世紀科学機構 21 世紀科学研究所連続セミナー」における森岡正博氏の講演「関係の中で立ち現れてくる「いのち」～ペルソナの哲学を構想する～」から触発を受け、その応答を試みたことで新たな知見を得ることができた。講演者の森岡先生に記して深謝いたします。

## 文献一覧

(本文中のレヴィナスの引用については下記の邦訳を参照した。)

- Lévinas, E. (1974) *Autrement qu'être ou au-delà de l'essence*. La Haye, Martinus Nijhoff. = (1999) 合田正人訳『存在の彼方へ』講談社学術文庫。  
——— (1980 [1961]) *Totalité et infini: Essai sur l'extériorité* (Phaenomenologica ; 8), La Haye, Martinus Nijhoff. = (2005, 2006) 熊野純彦訳『全体性と無限』(上・下) 岩波文庫。  
——— (1982) *Éthique et infini: Dialogues avec Philippe Nemo* (Livre de poche), Paris, Librairie Arthème Fayard et Radio-France. = (2010) 西山雄二訳『倫理と無限 フィリップ・ネモとの対話』ちくま学芸文庫。  
——— (2010 [1976]) *Difficile liberté: Essais sur le judaïsme*, Paris, Albin Michel. = (2008) 合田正人・三浦直希訳『困難な自由』法政大学出版局。  
——— (2011 [1979]) *Le temps et l'autre*, Paris, Quadrige/PUF. = (1999)

---

／繁殖性」の生物学的な捉え直しを通じて問うことができる。だが、その先の「ジェネレイショナル・ケア」の問題についてはどうだろうか。つまり、世話をされる、看取られる者の観点を踏まえた異世代間の関係に対して、レヴィナス思想に応答しうる余地があるのか。この点については、今後の課題としたい。

<sup>43</sup> 教育が関与するという問題で言えば、「多産性／生殖性」の文脈に見た「子ども」についても別の角度から問い直す必要がある。例えば、リオタールに見る「インファンス」、すなわち「自らを語らぬもの」という人間の側面があるのに対し、「多産性／生殖性」の果てにある「子ども」には自己同一性や「ことば」の存在を見て取ることができた。それは、「存在が自発的に語ること」と「存在そのものの語ること」という違いとして捉えた場合、「パーソン」論と「ペルソナ」論との差異と類似するような問題が立ち現われてくるようにも思われる。子どもをめぐるインファンス論については、森田 (1996 ; 2001) を参照されたい。

合田正人編訳「時間と他なるもの」『レヴィナス・コレクション』ちくま学芸文庫、231-299頁。

- 熊野純彦（1999）『レヴィナス——移ろいゆくものへの視線』岩波書店。
- 合田正人（2011）『レヴィナスを読む』ちくま学芸文庫。
- 郷原佳以（2012）「「顔」と芸術作品の非 - 起源」『現代思想』（2012年3月臨時増刊号 総特集：レヴィナス）Vol.40-3、285-299頁。
- 坂口ふみ（1996）『〈個〉の誕生——キリスト教教理をつくった人びと』岩波書店。
- 佐藤義之（2000）『レヴィナスの倫理——「顔」と形而上学のはざままで』勁草書房。
- 西平直編（2013）『ケアと人間——心理・教育・宗教——』ミネルヴァ書房。
- 檜垣立哉（2012）「逆向き幽霊としての子供——デリダに対抗するレヴィナス」『現代思想』（2012年3月臨時増刊号 総特集：レヴィナス）Vol.40-3、147-157頁。
- 福若真人（2013a）「「語り」による「死者」と「生き残った者」の関わり——レヴィナス思想における「埋葬」と「復活」を手がかりにして——」『人間社会学研究集録』第8号、45-65頁。
- （2013b）「レヴィナス思想における「子ども」の意味——過去・現在・未来を貫く〈善さ〉——」『京都大学大学院教育学研究科紀要』第59号、333-345頁。
- （2014）「「他者の死」への倫理的応答を触発する「教え」——レヴィナス思想に見る「死」の主題化と「語り直し」——」『ホリスティック教育研究』第17号、45-54頁。
- 村上靖彦（2004）「方法としてのレヴィナス——情動性の現象学における自己の地平構造——」『現象学年報』第20巻、29-39頁。
- （2012）『レヴィナス——壊れものとしての人間』河出書房新社。
- 森岡正博（1988）『生命学への招待——バイオエシックスを超えて』勁草書房。
- （2001）『生命学に何ができるか——脳死・フェミニズム・優生思想』勁草書房。
- （2010）「パーソンとペルソナ——パーソン論再考」『人間科学：大阪府立大学紀要』5号、91-121頁。
- （2012a）『生者と死者をつなぐ——鎮魂と再生のための哲学』春秋社。
- （2012b）「ペルソナと和辻哲郎：生者と死者が交わる場所」『現代生命哲学研究』第1号、1-10頁。
- 森岡正博・居永正宏・吉本陵（2008）「生命の哲学の構築に向けて（1）——基

本概念、ベルクソン、ヨーナス」『人間科学：大阪府立大学紀要』3号、3-68頁。

森田伸子（1996）「「子ども」から「インファンス infans」へ——変貌するまなざし——」『こどもと教育の社会学』（岩波講座 現代社会学 第12巻）岩波書店、157-173頁。

———（2001）「ポストモダニズムとインファンス」、増渕幸男・森田尚人編『現代教育学の地平——ポストモダニズムを超えて』南窓社、216-244頁。